2023.6.3 GEWANPHAUS 龍ヶ崎ゲヴァントハウス【オリジナルCDコンサート】

アニヴァーサリー特集 生誕200年 エドゥアール・ラロ 生誕100年 名指揮者スクロヴァチェフスキ

プログラム

今年は、フランスの作曲家、エドゥアール・ラロの生誕200年、ポーランド生まれの名指揮者、スタニスラフ・スクロヴァチェフスキの生誕100年の記念の年に当たります。そこで今日はこのふたりにスポットを当てたアニヴァーサリー特集です。**エドゥアール・ラロ**は1823年1月27日、スペイン系の血統を持ち、フランスのリールで生まれました。リール音楽院でヴァイオリンとチェロを学び、1839年パリ音楽院に入学、ヴァイオリンをアブネック、作曲をシュルホフに学びました。1845年頃から作曲を始め、歌曲や室内楽を書きますが認められず、一時期ヴィオラ奏者として演奏活動をしていましたが、1874年ヴァイオリンの大家サラサーテによって初演されたヴァイオリン協奏曲ヘ長調で評判を取ると、翌年に同じサラサーテによって初演されたスペイン交響曲も大成功を収め、ラロの名は一躍有名になりました。この時52歳、ラロは晩成型の作曲家でしたが、その後もチェロ協奏曲、バレエ音楽「ナムナ」、歌劇「イスの王様」等の主要作品を残し、1892年4月22日パリで亡くなりました。今日はチェロ協奏曲とスペイン交響曲という代表的な2作品をお聴きください。

スタニスラフ・スクロヴァチェフスキは1923年10月3日、ポーランドのルボフに生まれました。4歳でピアノとヴァイオリンを始め、クラクフ音楽院卒業後、パリ音楽院で作曲をブーランジェ、指揮をクレツキに学びました。1949年～1954年カトヴィッツェ・フィル、1956年～1960年ワルシャワ・フィル音楽監督。その間1956年にローマ国際指揮者コンクールに優勝。1960年にアメリカに移住すると、この年から1979年までミネアポリス交響楽団（ミネソタ管弦楽団）の音楽監督となり黄金期を築き上げました。1984年～1991年イギリス、ハレ管弦楽団首席指揮者。1994年からはザールブリュッケン放送交響楽団の首席客演指揮者となり、2003年には初来日、大きな話題となりました。わが国では2007年から2010年まで読売日本交響楽団の常任指揮者を勤め、NHK交響楽団には1996年の初共演以来たびたび来演しましたが2017年2月21日、93歳で亡くなりました。スクロヴァチェフスキは特にブルックナーの演奏で定評がありましたが、レパートリーは広く、切れの良い明快な音作り、溌溂とした引き締まった演奏が魅力で、欧米ではミスターSの愛称で親しまれた名指揮者です。（中川）

＊＊＊＊＊＊＊

エドゥアール・ラロ（1823～1892）：チェロ協奏曲ニ短調

ミクローシュ・ペレーニ（Vc）
エルヴィン・ルカーチ指揮ブダペスト・フィルハーモニー管弦楽団
（1977.1.3　ブダペスト、エルケル劇場でのLive）

スペイン交響曲ニ短調Op.21

シルヴィア・マルコヴィチ（Vn）
エリアフ・インバル指揮イタリア国立放送交響楽団
（2001.2.22　トリノ、ジョヴァンニ・アリエリホールでのLive）

＊＊＊ 休 憩 ＊＊＊

アントン・ブルックナー（1824～1896）～スクロヴァチェフスキ編曲：弦楽のためのアダージョ（弦楽五重奏曲ヘ長調第3楽章）

スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ指揮ＮＨＫ交響楽団
（2002.4.19　ＮＨＫホールでのLive）

アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）：交響曲第7番ニ短調Op.70

スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ指揮北ドイツ放送交響楽団
（1975.9.7　モントルー国際会議場ホールでのLive）

★ホームページアドレス　http://gewandhaus.sakura.ne.jp/wp/

曲　目　解　説

ラロ：スペイン交響曲ニ短調作品21

北フランスのリールで生まれたラロは、祖父の代まではスペイン人だったというスペイン系の血統を持っていました。生地のリール音楽院でヴァイオリンとチェロを学び、パリ音楽院に入学してからもヴァイオリンをアブネックに、作曲をシュルホフに学びました。作曲は1845年頃から始め、1849年に歌曲を出版、さらに室内楽を発表しますが認められず、1855年から64年頃までは弦楽四重奏団のヴィオラ奏者として活動しました。1865年頃から再び作曲に専念、67年にコンクールに応募したオペラ「フィエスタ」が第3位に入賞。1874年にヴァイオリン協奏曲第１番ヘ長調が天才サラサーテのヴァイオリンで初演されて評判となると、翌75年に同じくサラサーテによって初演された**スペイン交響曲**が大成功を収め、ラロの名は一躍知れ渡りました。スペイン交響曲は1873年50歳の時に作曲され、2年後の1875年2月にパリのコンセール・ポピュレールで初演、パブロ・デ・サラサーテに捧げられました。交響曲と言っても実際はヴァイオリン協奏曲で、4曲あるヴァイオリン協奏曲の第2番に当たります。題名の通り、スペイン情緒が濃く、超絶的技巧を要するヴァイオリンの華やかな色彩とシンフォニックなオーケストラの融合は見事で、今日ではロマン派を代表するヴァイオリン協奏曲のひとつに数えられています。ラロは異国情緒を盛り込んだ作品を数多く書きましたが、ヴァイオリン協奏曲も第3番が「ノルウェー幻想曲」、第4番が「ロシア協奏曲」と名付けられています。

第１楽章　アレグロ・ノン・トロッポ　　第２楽章　スケルツァンド．アレグロ・モルト
第３楽章　間奏曲　アレグロ・ノン・トロッポ　　第４楽章　アンダンテ　　第５楽章　ロンド．アレグロ

ラロ：チェロ協奏曲ニ短調

スペイン交響曲の大成功によって作曲家としての地位を不動のものとしたラロは、1877年54歳の時に唯一の**チェロ協奏曲ニ短調**を書き上げました。翌78年12月9日にジュール・パドルーの指揮するコンセール・ポピュレールの演奏会で、パリ在住のベルギーのチェリスト、アドルフ・フィッシャーの独奏によって初演されました。曲はフィッシャーに献呈されています。サン=サーンスのチェロ協奏曲第1番に触発されて作曲したというこの曲は、古典的な構成を継承しながら、ややもすると管弦楽に埋もれがちなチェロという楽器を巧みに引き立て、スペイン風の異国情緒を生かした管弦楽法も見事で、チェロ協奏曲の重要なレパートリーのひとつとして人気の高い名曲です。

第１楽章　前奏曲　レント　　第２楽章　間奏曲　アンダンティーノ・コン・モート
第３楽章　アンダンテ ー アレグロ・ヴィヴァーチエ

ブルックナー（スクロヴァチェフスキ編曲）：弦楽のためのアダージョ（弦楽五重奏曲ヘ長調 第３楽章“アダージョ” 弦楽合奏編曲版）

1824年9月4日、オーストリアのアンスフェルデンで生まれたアントン・ブルックナーは、11歳のころオルガンの手ほどきを受け、13歳の時に修道院の少年聖歌隊員、1856年にはリンツ大聖堂のオルガン奏者となり、そのころジモン・ゼヒターに対位法を学びました。1968年にウイーン音楽院の教授、兼オルガン奏者となり名声を得て行きました。本格的な創作活動は40歳の頃からで、習作を含めた11曲の交響曲を残し、ベートーヴエン以後の最も重要な交響曲作曲家のひとりとして確固たる地位を確立しています。室内楽作品はブルックナーの死後発見された習作の弦楽四重奏曲と弦楽五重奏曲の2曲。弦楽五重奏曲ヘ長調は、当時の有名なヴァイオリニスト兼指揮者だったヨーゼフ・ヘルメスベルガーの勧めによって作曲され、1879年に完成しました。交響曲第5番を書き上げた後の作品です。1881年11月にウィーンで、ブルックナーの弟子たちのアンサンブルで初演されましたが、これは非公開で、公開初演は1885年1月にヘルメスベルガー弦楽四重奏団らによってウィーンで行なわれました。**第3楽章のアダージョ**は交響曲の緩徐楽章に共通する特徴がよく現れていますが、これを作曲家でもあるスクロヴァチェフスキが弦楽合奏用に編曲、より広がりのあるふくよかな響きを引き出しています。

第１楽章　中庸の速度で　　第２楽章　スケルツォ．速く
第３楽章　アダージョ　　第４楽章　活き活きと動きを持って

ドヴォルザーク：交響曲第７番ニ短調作品70

1841年9月8日にチェコのネラホゼヴェスで生まれたアントニン・ドヴォルザークは、生涯9曲の交響曲を残しましたが、生前に出版されたのは第5番以後の5曲で、その後残りの4曲が出版され、年代順に整理されたため、昔第2番と言われていた交響曲が第7番、第5番は第9番「新世界から」になりました。1884年から1896年の間ドヴォルザークは、9回に渡ってイギリスを訪れ、親愛な関係を築きますが、この時ロンドンのフィルハーモニック協会から交響曲の作曲とその初演指揮の委嘱を受け、完成したのが**交響曲第7番ニ短調**です。1884年12月に着手、1885年3月に完成し、同年4月22日ドヴォルザークの指揮で初演され大成功を収めました。彼はこの作品を手掛ける前にブラームスの交響曲第3番を知り、これに大いに啓発され、創作意欲を掻き立てられたといわれています。チェコ固有の音楽的要素と西ヨーロッパの技法を巧妙に融合させ、真に国民主義の音楽家として大成する、その第一歩となる作品です。これまでになかった悲劇的な気分と劇的効果、それにチェコ舞曲を取り入れるなどドヴォルザークの個性がすみずみまで表現された名曲です。

第１楽章　アレグロ・マエストーソ　　第２楽章　ポコ・アダージョ
第３楽章　スケルツォ．ヴィヴァーチエ　　第４楽章　フィナーレ．アレグロ